



## ⑤ 井戸を掘った人々

### 日中ドラマ海賊版

中国で海賊版が出ました、というご報告をいただいた。とはいえ、文面は喜びに満ち溢れている。メールの相手は、制作会社テムジン社のディレクター、小柳ちひろさん。2月10日にNHKのBS1で放送された、「中国“改革開放”を支えた日本人」という前・後編99分のドキュメンタリーを作った人だ。

日本で放送した番組に、誰かが1週間ほどで中国語の字幕をつけ、Weibolにアップしたそう。多くの人に拡散され、月末までに約650万回再生された。おそらく日本で番組を見た人よりもすでに多い。素晴らしい手応えだ。

小柳さんは、華奢な外見とは正反対の、とても骨太な仕事をする人だ。今回の構想を練るに当たって、彼女は数多くの学術書を読み込み、私が以前書いた本にも付せんをたくさん貼り付け、中国語資料についての専門的な質問をしに福岡にやってきた。そのエネルギーに圧倒され、私もついついお手伝いをしてしまったが、多くの人がそうやって番組に巻き込まれていったようだ。放送前には多くの知人から次々と番組のお知らせが舞い込み、日中関係の「井戸を掘った人々」の久々のフィーバーぶりが伝わってきた。

### 歴史の指針

この番組でよかったのは、日中関係や改革開放と

いった歴史の流れの中に、その波を懸命に泳ぎ切った個人の体験や思いが差し色のように注入され、重厚だがすがすがしい人間ドラマになっているところだ。

登場人物の背景には日中戦争の影が見え隠れする。日本の政財界の指導者には中国への贖罪（しょくざい）意識があったし、通訳として日中の橋渡しをした人々も、もとは中国残留孤児だったりする。中国側で対日経済協力の先頭に立った副総理・谷牧の故郷は、日本軍に二度も焼かれており、実母は彼をテレビで見て「売国奴」と泣いたという。

しかし、そうした過去をものともせず、彼らは中国の「現代化」のため具体的に協力を進め、中国が計画経済から市場経済に移行する土台作りをした。「昔世話になったコマツのためなら」と、北京内燃機総廠の元社長は不自由な体を押してカメラの前に出てくる。一人ひとりの笑顔に、相手への偽りのない信頼関係が見える。

番組には日中両国で書き込みが寄せられた（中国では海賊版サイトだが）。どちらの国でも多くの視聴者が、「こんな歴史、知らなかった」と率直な驚きを示している。日本ではある人が、「日中がどちらも相手をリスペクトしていたのが印象的だっ

た」と言い、中国ではある人が、「教科書で習うつまらない『歴史』が、一人ひとりの人生だったことに初めて気づいた」と述べている。中国が大国化し、新たな日中関係をどう切り開いていくか悩む今だからこそ、この時代を振り返る意義は大きい。

### 日中関係のバトン

当時の日中関係については実は、近年、若い人たちの関心が高まっている。そう思うのは、私のところに日中、そして第三国からの問い合わせがかなり頻繁にくるからだ。「中国改革開放初期の日中協力」というピースがなければ、アジア現代史のストーリーが繋がらないことに、多くの人々が気づき始めている。

番組の最後は、中国国務院の経済顧問を務めた大来佐武郎・元外相の言葉で締めくくられる。しかし、中国の視聴者が最も感動し、だからこそ海賊版動画の「表紙」にも選ばれたシーンは、その直前に流れる武吉次朗氏（日本国際貿易促進協会相談役）の発言だ。「中国がもっと発展して欲しい。けれども同時に中国は、世界から祝福され、尊敬されるような国になって欲しい」。日中の二つの文化の狭間で過ごしてきた武吉さんは無意識かもしれないが、意識ある中国人の心には強く刺さる言葉だ。

武吉さんは、次のように続ける。「もう私の出る幕はないです。もう何もありませんね、あとはもう若い人たちに任せる」。番組を通して、きっと日中両国の多くの有志が、「井戸を掘った人々」からのバトンを受け取っただろう。本作が近いうちに中国でも正式に放送されるよう願っている。

（益尾知佐子・九州大学比較社会文化研究院准教授）

# 改革開放を支えた日本人